パパカンガルーケア実施前後における父親意識の変化

Transformation of father's recognition before and after kangaroo care.

信州大学医学部附属病院ＮＩＣＵ

福島範子、城井三奈、下村陽子

要旨

早期産の父親の場合児は集中治療が優先され父子分離状態となり、父親であるという意識を抱きにくいと考えられる。そのため当院ＮＩＣＵではパパカンガルーケアを導入し、ケア実施前後の気持ちの変化について父親にアンケートを行った。その結果実施した父親全員がカンガルーケアに満足し、児に対する肯定的な回答や父親意識の高まりを感じさせる回答が得られ、パパカンガルーケアは父親意識を高めていくことに有効的であることが示唆された。

キーワード：父子分離、パパカンガルーケア、父親意識

Ⅰ　はじめに

カンガルーケアとは発展途上国地域での極低出生体重児を対象に、保育器保育に変わる代替方法として始まった。母子相互作用、母子心理や児の発達面などに優位に作用することがわかり、先進国にも取り入れられるようになり、現在ではＮＩＣＵにおけるファミリーケアプランの１つとなっている。カンガルーケアには①母児の愛着形成促進、②児の体温維持、③呼吸・循環系の安定、④児がＮＩＣＵ環境から受けるストレスの軽減、⑤早期産になった母親の罪責感・傷つきが癒される、⑥親が児と触れ合うことで「親であるということ」を実感できるなど、様々な効果があるといわれている。

早期産の場合、児は集中治療が優先されるため、母と子が初期より接触できない母子分離状態となることが余儀なくされる。父親の場合も同様に、児と接触できないことで父親意識を抱きにくいのではないかと考え、2003 年より父親によるカンガルーケア（以下パパカンガルーケア）を導入した。またパパカンガルーケアによる父親の心理的影響について調べるため、カンガルーケア実施前後の心理的変化をアンケートにより検討した。

Ⅱ　研究目的

父親によるカンガルーケア実施前後における父親の気持ちの変化を把握し、カンガルーケアが父親意識の育成にどのような効果があるのかを検討する。

Ⅲ　研究方法

1．調査期間：平成15年6月～平成16年9月。

2．対象：調査期間中に当院分娩部で出生し、ＮＩＣＵに入院した児とその父親。

3．アンケート調査：カンガルーケア実施後、父親に実施前後の気持ちの変化にアンケートを行う。

なお個人が特定されないよう、倫理的配慮のもとにアンケートを行った。

＜カンガルーケア実施基準＞

1．人工呼吸器から離脱できている。

2．無呼吸発作がないまたは回数が少ない。

3．修正週数31週以上。

4．体温が比較的安定している。

体重は1～4の項目に沿っていれば特に制限なし。

輸液や保育器内酸素使用中であっても、医師の許可があれば実施した。

＜カンガルーケアの準備＞

① 医師・看護師間のカンファレンスにてカンガルーケア実施可能かどうかを話し合い、医師の許可が出たうえで実施する。

② 予めご両親にカンガルーケアについて方法とその効果を説明し、やりたいという希望を確認する。

③ 実施時間は父親が面会に来ることができる日・時間とし、特に指定なし。
父親が面会に来られる時間をあらかじめ看護師へ連絡するように説明する。
ケアを行う時間が他の患児と重ならないように時間を調整する。

④ カンガルーケアを行う際には肌と肌が直接触れることができるように前開きの洋服を着用してもらい、またガウンを前後逆に着用するように説明する。

⑤ 室温を24～26度に調節し、エアコンの風が直接あたらないように位置を調節する。
また児の保温のためバスタオルを準備する。

⑥ リラックスチェアーを準備し、パーテーションを使用してプライバシーの保護と親子だけの環境作りを行う。パパカンガルーケア実施中は母親にもパーテーション内に入ってもらい、家族だけの時間を過ごしてもらう。

カンガルーケアを行う時間は初回は 10 分程度よりはじめ、児のバイタルサインが安定していれば時間を延長する。

<カンガルーケアの方法>

① カンガルーケア実施前の児のバイタルサインを測定する。

② 心電図モニターの電極を児の背部にはる。

③ 父親にリラックスチェアーにかけていただき、おむつをつけた児を胸の上に立て抱きにする。心電図・SpO_2モニターは装着したまま行う。

④ 保育器内酸素を使用している時は口元マスクか経鼻カヌラを使用する。

⑤ 児にバスタオルをかけ、体温保護をする。

⑥ 児の体位が安定したら看護師はその場を離れ、モニターよりカンガルーケア中の児の状態の変化やご両親の反応等観察する。
家族だけの時間を大切にできるよう、看護師からの声かけは必要最小限とした。

⑦ ケア終了後保育器に戻し、バイタルサインのチェックを行う。

⑧ 最低2回以上ケアを実施した後、父親にアンケート調査を行う。

<父親へのアンケート内容>

1．赤ちゃんが生まれたとき、初めて赤ちゃんと会ったとき、どんなお気持ちでしたか。

2．初めてカンガルーケアをしたとき、どんなお気持ちでしたか。

3．行ったときの環境・時間はいかがでしたか。

4．カンガルーケアを行う前、行った後でお気持ちの変化はありましたか。(赤ちゃんに対してなど、どんなことでも構いません)。

5．これからもカンガルーケアを続けていきたいと思いますか。

6．カンガルーケアに対してスタッフに気をつけてほしいことや、ご要望(こうしてほしかった等)がありましたら、教えてください。

7．NICUの環境にどのような印象をもたれましたか。

Ⅳ 結果

1．実施したケース

・ 調査期間内にＮＩＣＵ入院した極低出生体重児を含む低出生体重児とその父親５名。

・ 児の出生体重は425ｇ～2144ｇ（在胎26週1日～33週1日）。

・ ケア実施時の日齢12日～88日（修正31週5日～38週5日）。

・ ケア実施時の体重は1006ｇ～2440ｇ。

・ 全員呼吸器は離脱しており、クベース内酸素・ネオフィリン使用患児は2名。

・ 父親の年齢は平均38.4歳（33～51歳）。

2．カンガルーケア実施前の面会時の様子

・ 硬い表情で無言で児を見つめている。

・ 児の様子・治療について医師に細かく質問し続ける。同じ質問を繰り返す。

・ 頑張れよと声をかける。

・ 怖いから触われないとタッチングを行えない。

・ 指先だけで児の体に触れる。

・ モニターのアラーム音に敏感に反応する。

・ 数分面会しただけで帰ってしまう。

3．カンガルーケア実施中の面会時の様子

・ 実施日、時間は父親の仕事が休みである週末の14時の授乳（栄養注入）前後が多かった。

・ 1回のケア時間は10分～40分であった。

授乳（栄養注入）前で児が空腹のため泣いたり暴れたりしまうときは授乳後にカンガルーケアを行った。

・ カンガルーケア実施前体温が少し低めだったが、ケア実施後体温上昇がみられたケースがあった。

・ 明らかな無呼吸発作は全例みられなかった。

・ ケア実施後の父親はケア実施前より表情は明らかに良くなり、リラックスして児と一緒に眠ってしまうこともあった。

・ ケア実施後は児に対し笑顔で話しかける様子がみられるようになった。

・ 手のひら全体を使って児に触れるようになった。

4．父親のアンケートの回答

質問1　赤ちゃんが生まれたとき、初めて赤ちゃんと会ったとき、どんなお気持ちでしたか

・ 嬉しさとともに授かった命への責任を感じた。
・ 点滴等がついていて驚いた。仕方ないと言い聞かせたが気持ちの整理をするのに時間がかかった。
・ 自分の子どもという実感があまりわかなかった。
・ 小さく生まれたので大丈夫かなと心配になった。
・ 小さくても頑張っているんだなと思った。

質問2　初めてカンガルーケアをしたとき、どんなお気持ちでしたか

・ 子どもの体温を感じとても嬉しかった。
・ 緊張した。
・ わが子を実感できた。
・ 自分たちが守ってあげないといけないという気持ちを強く感じた。
・ こんな抱き方で（児が）痛くないのかな。
・ とても気持ちよくて一緒に眠ってしまった。
・ とても優しい気持ちになれる時間だった。

質問3　行ったときの環境・時間はいかがでしたか

・ できるだけ長い時間行いたい。
・ 満足している。

質問4　これからもカンガルーケアを続けていきたいと思いますか

・ 続けていきたい（全員回答一致）。

質問5　カンガルーケアを行う前、行った後でお気持ちの変化はありましたか

・ 直接触れ合うことで親の自覚・責任が高まる。
・ 素肌で子どもを抱っこすると自分の子どもという気持ち（結びつき）が強く感じることができた。
・ 始めは怖くて大変だと思ったが、2回・3回とやっていくとこつがつかめてきてまた抱っこしたいなと思った。
・ これからこの児とずっと付き合い、成長を見守っていくんだな。

・　一緒に過ごしていく過程を想像した。

質問6　カンガルーケアに対してスタッフに気をつけてほしいことや、ご要望がありましたら、教えてください

・　カンガルーケアが児にどのような良い面があるのか教えて欲しい。

・　最初は○分くらいなどいっていただければ対応しやすい。

質問7　ＮＩＣＵの環境にどのような印象をもたれましたか。

・　ＮＩＣＵはもっと悲壮感漂うところかと思っていた。

・　スタッフの対応がよく子どもをあずけていて安心していられた。

・　息子に自由に触れ合えてよかった。

・　大変優しく言葉をかけていただいた。

・　ＮＩＣＵの方々の仕事にまた意識に感謝している。

Ｖ　考察

父親は子どもが生まれてから直接的な関わりを通じて父親意識が育まれ[2)]、父親ということを実感していく傾向にあり、妊娠期より母性をはぐくんでいく母親に比べ、親としての意識を抱きにくいと考えられる。特に低出生体重児の父親の場合、児は集中治療が優先され、父親も仕事があるため母親に比較して面会が少なくなりがちである。私たちは看護者は母児へのケアに目を向けがちになるが、同じ家族の一員として父親も児と関わりができるようにしていくことは必要であり、早期より看護介入していくことが大切と思われる。

パパカンガルーケアを導入した結果、実施した全例の父親がカンガルーケアに満足した。直接胸に抱くことにより、児の体温・鼓動・息づかい・重みを実際に皮膚を通して感じ、かわいらしい寝顔や小さな手足を見ることで児の存在をより近くに感じることができたと思われ、それが父性の育成につながっていくと考えられる。

またそのスキンシップを繰り返していくことで児に対するかわいらしさ・いとおしさが生まれ、児の将来に対する不安や心配が薄れていったのではないかと考える。

アンケート結果からケア実施後に「親の自覚・責任が高まった」「自分の子どもという気持ちを強く感じることができた」「これから一緒に過ごしていく過程を想像した」という言葉が聞かれており、父親にとってカンガルーケアは父親意識を高めていくために有効的なケアの１つであると考えられる。

V　まとめ

パパカンガルーケアは児への愛着形成を促進し、児に対し親としての自覚・責任などの父親意識を高めていくことに有効的なケアであると考えられる。

ＮＩＣＵではファミリーケアの充実を目指して、今後もパパカンガルーケアを継続して行っていく。

謝辞

今回この調査にあたりアンケートにご協力いただいたお父様他、皆様に感謝いたします。

ありがとうございました。

参考・引用文献

１）堀内勁、飯田ゆみ子、橋本洋子：カンガルーケア　ぬくもりの子育て　小さな赤ちゃんとの家族のスタート、ｐ9－11，25－31、メディカ出版、1999

２）増田芙美，片山理恵，内藤直子，池内和代：カンガルーケア実施前後による父親意識の変化、香川母性衛生学会誌、１巻１号、ｐ49—55、2001

３）橋本洋子：ＮＩＣＵとこころのケア、ｐ18－21、メディカ出版、2000

４）高塚美紀，日下部啓子，大湯恵，飯田ゆみ子：カンガルーケアを実施した父親の気持ちの変化、神奈川母性衛生学会誌、２巻１号、ｐ28－30、1999

５）中山恵美，泉山春恵，加藤倶子，渡部雅子，大熊光枝：カンガルーケアを導入して　実施した結果と父母のアンケート調査より考える、旭市病誌、33、ｐ41－44、2001